



“木鶏”とは (1 / 2)

理想の人間像

中国の古典「莊子」に「木鶏」という話があります。安岡正篤先生が講和の中で紹介しています。

紀省子という人が、鬪鶏の好きな王のために、軍鶏を養って調教訓練をしていました。

十日ほどたったころ、王が”もうよいか”と聞きましたところ、紀省子は”いやまだいけません。空威張りして「俺が、俺が」というところがあります”と答えました。

さらに十日たって聞きますと、”まだだめです。相手の姿を見たり声を聞いたりすると、興奮します”。

また十日ほどたって聞きますと、”まだだめです。相手を見ると、睨みつけて、圧倒しようとするところがあります”

こうしてさらに十日たって、また王が聞きますと、初めて”まあ、どうにかよろしいでしょう。他の鶏の声がしても、少しも平生と変わるところがありません。その姿はまるで木彫りの鶏のようで微動もしません。全く徳が充実しました。もうどんな鶏を連れてきても、これに応戦するものはなく、姿を見ただけで、逃げてしまうでしょう”といいました。

これがいわゆる”莊子の木鶏”で、その鶏は非常に強く、敵がいてもいなくても、眼中にない態度でした。そして相手の鶏は、鬪う前にすくんでしまって、その”木鶏”は百戦百勝だったそうです。

から威張りは偽物です

木鶏というのは、本物だということです。

会社で同僚から君呼ばわりされたといって怒ったり、課長になって”課長さん”と呼ばれなかったら返事しないというようなうちは”空威張り”で、到底木鶏とはいえません。一般的にいて、いい格好をしたがって、いい洋服を着たり、いい自動車に乗ったりするのは偽物であって、”木鶏”ともなると、そんなことに拘泥しません。ゼニがあるとかないとか、社会的地位が高いとか低いとか、そういう形にとらわれません。

有名な実業家で、宗教家のようなポーズをとり、修身の教科書に出てくるようなことをいってマスコミ受けするような人がいますが、まだまだ本物とはいえません。なかなか本物 - 木鶏になれないものです。



“木鶏”とは (2 / 2)

イマダモクケイニオヨバズ

双葉山という大横綱がいましたが、安岡先生は双葉山に木鶏の話をし、書まで書いて渡しています。双葉山が六十九連勝という偉業をなしとげる前ですが、強いというので、たいへん人気の出ている頃でした。

安岡先生が一杯機嫌で”君はまだまだ、だめだ”というと、双葉山はさすがに謙虚で、”なぜだめですか”と問い返しました。

そこで安岡先生は木鶏の故事を説いたという次第ですが、双葉山はたいへん感じ入り、先生からもらった書を朝晩静座し、木鶏になる訓練をしたというのです。

これには後日談があります。

安岡先生がヨーロッパへ行く船旅を楽しんでいるところへ、双葉山から ”イマダモクケイニオヨバズ”という電報が届きました。七十連勝を目前に敗れたことを知らせてきたのです。

双葉山は当代随一の人気者でしたし安岡先生は一代の碩学ですから、この話は自然に広がっていったのです。

